

研究報告 REPORT ON THE RESEARCH AND PRACTICE

『状況のアーキテクチャーへ？』

京都市立芸術大学美術学部構想設計

“What is Situation Design?”

Kyoto City University of Arts Faculty of Arts Concept and Media Planning

Satoru Takahashi 高橋 悟

【はじめに】

大きな建築物が建てられる前には、まず現場に仮設作業小屋が立つ。先に立つ小屋の形と後で建つ建築の形には何の関連もない。それは、計画や設計とは位相が異なる記録に残ることのない生の時空へと接続されている。「状況のアーキテクチャー」とは、そんな仮設小屋の一つだ。本稿は①大学移転プレ事業の一環として開催された「Still Moving — On the Terrace」並びに、②「状況のアーキテクチャー：拡張された場に於けるアートマネジメント」（大学を活用した文化推進事業：文化庁助成事業：）に関わる私的なプロジェクトレポートである。（正規の報告書は別途作成する。）上記プロジェクトは、崇仁地区への大学移転を控え、改めて芸術と大学と地域の関係を考察する為の実験的プログラムでもある。但しそれは、将来の計画や設計への接続を目指すものでなく、それらとは異質で場違いなスタンスで試行された課外事業である。

【I】「Still Moving —On the Terrace」

(京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA

2016年4月16～5月29日)

20年ほど前は、大学 x アート = 「空き地」みたいなものと思っていた。

「無限定な風景の中で、空き地を静かに差し出すことは、多分、空間的な場所のみではなく、無目的な待つことを一時的にせよ実際に存在させること、いまここにありながら、どこにもない風景の中で空き地と共に作品として差し出される贈り物を受けとめる者として想定された他者が無規定であるのは、美術の文脈を超えた広がりの中で人々を想定することではなく、住所氏名職業を欠いた人との出会いから作られる場所・共同体が存在不可能であり、仮に存在してもそれは、人相、声に変調された管

理網の中にであり、今日の祝福が明日の罵倒に自然に変わるような場でしかないから。概念として想定しうる全ての聴衆形態のネガとしてある想定しえない聴衆が空き地によって祝福されるものとして待たれている。(注—①)」
Still Moving-On the Terrace は、崇仁学区を主な発表会場とした2015年に続く企画である。Terrace とは2020年度に計画されていた先行移転のキーコンセプトで、これに対応する形で企画は立ち上がったが、市の方針変更で先行移転は中止となった。これに伴い、空き地に「terrace」を仮設する当初の案は取りやめ、「terrace」というコンセプトを函数として既存のギャラリー空間を読み替えるという手法へとシフトされた。ギャラリー二階の吹き抜けスペースを取り囲んで、参加メンバー達が行った立ち話から、このアイデアは展開した。スキーマ建築計画の長坂常氏には、会場構成デザインではなく、



「空間の誤用」をテーマにした「読み替え図」（例えば、吹き抜けスペースは会議室、階段は劇場、可動壁面はホテルなど）の作成を依頼し、これを参加メンバーに割り当てることにした。割り当てられた「読み替え図」は、必ずしも固定化したものではなく誤用の誤読なども可能である。例えば、筆者が割り当てられたのは、エレベーターとトイレを展示室に、可動壁をホテルに誤用するというものであったが、大学や崇仁の文脈とも重なるために、エレベーター＝学長室＝工具箱、可動壁＝芸術資料館、トイレ前のホワイエ＝崇仁アーカイブズ（崇仁祭りのお囃子の譜面を壁紙にし、その前を崇仁小学校に設置されていた二宮金次郎像の複製が徘徊する。）へと誤読することにした。通常の展覧会に於けるキューレーション、会場構成、作品配置とは異なりオープンエンドなゲーム形式で展示に臨むことになったが、肝要な点は、空間の誤読ではなく、従来の役割分担（キューレーション、デザイン、作家、事務職など）の「誤配」による不安定な場の生成が可能となったことである。

【Ⅱ】「状況のアーキテクチャー：拡張された場に於けるアートマネジメント」

（文化庁助成事業「大学を活用した文化推進事業」
2016年4月1日～17年3月31日）

大文字のARTとしての「芸術」の鑑賞やその普及を目的としたアートマネジメントではなく、小文字のartsすなわち、ヒトの生存に関わる多様な術のネットワークの生成を主眼として本事業はスタートした。ただし、フードマルシェやアートバザーなどポピュラーな手法での地域マネジメントではなく、活用するに足る芸術大学の知と技に関わる必要がある。そこで、まず3つの基本的なテーマを立てることになった。

『本事業は、芸術を介した人間の相互関係及び人間と社会の〈あいだ〉の生成を通じて、総合的な視点から芸術実践を捉え直し、異なった領域、文化、制度を結びつけ、専門家と市民が共同で地域社会に新たな状況を構築するアートマネジメントの可能性とそれを担う人材の育成を目的としたものです。その為に、本事業では、物質・生命・社会という人間の根本に関わる3つの活動を実施します。

テーマ1 物質：「Transferring Matter: 創造的アーカイブ」

テーマ2 生命：「Tracing Life: 生存の技法 ケア×アート」

テーマ3 社会：「Trading Communities: 制度を使った多文化共生」

* Transfer＝転移する、Trace＝辿る、Trade＝交換する
アートリテラシーの普及や展覧会のキューレーション、町

おこしとしてのアートイベントの企画などといった従来型のアートマネジメントの次の段階に向けて、本事業では、今後ますます必要となる2つの技術の獲得を目的とします。

①芸術を媒介として、異なった領域、専門技術、地域、文化、世代、制度、行政を創造的に連携する
横断技術

②多様な専門知と市民知を相互触媒的に交流させ、地域の現場に於いて協働で独自の価値を創出する
臨場技術

これら水平と垂直の二軸が交差する位置に立ち、総合的な視点から、現代の社会や地域が抱える問題を、アートの知を活用して捉え、次世代へと継承できる創造的なビジョンを多様な手法で「発振」できる人材の育成を目指します。（注②）』

ワークショップ、セミナー、公開講座に加え展示発表や公開パフォーマンスなど27の活動からなる事業で参加者の総数は1000名を超えた。ここでは、その中から2つの事業について紹介する事にする。

◇「リサーチプログラム：Around the Terrace / 芸術と大学の設計」

（京都芸術センターフリースペース 2016年12月16日）

出演 相馬千秋（特定非営利法人 芸術公社代表）

田中功起（アーティスト）

橋本祐介（ロームシアター京都 プログラム・ディレクター／KYOTO EXPERIMENT
プログラム・ディレクター）

山本麻友美（京都芸術センター チーフ・プログラム・ディレクター）

藤田瑞穂（京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA
（アクア）学芸員）

進行 高橋 悟（京都市立芸術大学美術学部教授）

今回のリサーチプログラムは、大学の枠組みを超えたさまざまな主体や団体との緩やかな連携が、自発的に成長してゆくような、出入り自由で無責任な場を保証する事を目的としたものである。その為、京都芸大の教育や運営の外部で創造・実践を展開している方々を中心に招待し、職人、天才、起業家といった今までのアーティスト像とは異なるオルタナティブな価値を生み出すクリエイターの姿やそれを可能にする場について意見を交わすことにした。

具体的なリサーチ手法としては、

A 班：相馬 x 山本（大学のオルタナティブとしての中間組織の可能性）

B 班：田中 x 藤田（芸術大学と未来のアーティスト像：TERRACE）

C 班：橋本 x 高橋（ジャンルを横断する実践と教育の実験）
上記のように、登壇者をまず三つのチームに分けることにした。



芸術センターフリースペースの会場には、震災時に使用される仮設避難所のデザインを転用し、大きく3つの区画（それぞれの区画サイズは2x8m）を設営した。この三区画は、カーテンで仕切られており、それぞれ小さな8区画に分けられている。（区画サイズは2x2m）。当日に参加される一般の方々や学生には、3種類の整理番号を配布し、A・B・C区画に、入ってもらったが、開演までは、二畳サイズの小さな区画の中で見知らぬ他人と時を過ごすことになる。開演と同時に、小区画のカーテンが開けられ、20人程度の人々が出演チームをナビゲーターとして60分間の対話を行った、これが第一部。続く第二部では、全ての区画のカーテンを開けて、全体闊論に入った。今回のリサーチプログラムは、特定の方向付けや、集約を目指すものではなく、個々の区画の視差を活用し、我々

の思考や芸術の在り方を多元的にすることを目的としたものであったが、仕切りを変化させる事で通常のシンポジウムとは異なり、場における力の相互作用の変化がダイナミックに起こると共に、段階的に共有感覚が増えてゆく事に強く興味を惹かれ、今後も別の形で展開できるという感触を得た。

◇「Tracing Life 成果発表：ラップ x ケア x アート」
（京都芸術センターフリースペース 2016年12月17日）
出演 Shing02、たんぽぽの家メンバー+スタッフ、
倉智敬子+高橋悟
ワークショップ受講者

2016年の10月の一週間の期間、一般財団法人たんぽぽの家でワークショップを行った。たんぽぽの家は、多様な手法で障害者の表現活動を支援しているユニークな場である。この施設で特に重要なのは、絵画や彫刻といった表現技法だけでなく、時刻表を使った仮想の旅、天気予報の語り部、コトバにならない発声の繰り返しなど、当事者の生の文脈に接続された行為を丁寧に見守りながら自発的な活動をサポートする一貫した姿勢を持っている事である。今回の活動は、このたんぽぽの家に、国境を超えて活躍するヒップホップMCのShing02を招いた実験的な試みである。発想の原点は、障害者や彼らの表現に関わる既存イメージについて、当事者、スタッフと共に捉え直してみたいという思いであった。ヒップホップは、日常の手近にあるものを活用しブリコラージュ的に作り上げる挑戦的なアプローチだが、施設での当事者達の活動も又、生の文脈に接続されているからこそ、そのインパクトを持ち得ている。両者共に、「生きること」に原点がある。現在、東京オリンピック、パラリンピックを前にして、日本では、多数の文化イベントが企画され多くの施設や障害者達も、その動きに巻き込まれつつあ



る。その事に異論はないが、障害者の表現を既存の芸術の価値基準で評価する事で神話化したり、自律や健常への方向付けがなされる事には違和感がある。敢えて言うなら、「脱—健常」へのベクトルが必要だろう。ケアという命に近い場で、当事者とヒップホップとアートが会う事は、当事者の世界を説明する事ではなく、ヒトやアートと社会の関係を多元化する事にある。12月17日の当日は、ワークショップ記録映画の上映や、たんぽぽの家の方々、参加者、shing02との共演ライブが行われた。それ

は、対話やコミュニケーションというよりは、異なる感性、時間の感覚が織りなす「生の縫れ」の現場であったように思う。

註

注－1「構想設計 1970-1995」卒業生からの報告 p87

注－2「状況のアーキテクチャー：拡張された場に於けるアートマネジメント」募集案内より